

平成24年度かながわの遺跡展・巡回展

# 勝坂縄文展

THE KASSAKA JOMON IN KANAGAWA



## ごあいさつ

縄文時代は、日本列島において自然の積極的な開拓や計画的な食料の生産を開始する以前の時代です。自然との共存共生を実現していた文化として、今日あらためてそのライフスタイルへの関心が高まっています。

本展覧会は、そのような時代に作られた魅力的な造形、その生々しさを通して、当時の人々の感性を感じ取っていただく展覧会です。縄文時代の造形の中でも、特に様々な装飾が施されることで知られる勝坂式土器に焦点を当て、縄文土器の多様な姿をご紹介します。また、縄文造形の魅力をいち早く見出し、世界中の眼を縄文土器に向けさせた岡本太郎さんの作品もあわせてご紹介します。

また、勝坂式土器の名の由来になっている国指定史跡勝坂遺跡（相模原市）についてご紹介します。勝坂遺跡は、日本を代表する縄文遺跡として古くから知られ、これまで一〇〇回を超える調査が行われています。本展覧会では、これらの調査から得られた多くの成果を、今日的な視点からご紹介します。

最後に、ご所蔵者の皆様をはじめ、本展覧会開催にあたってご支援を賜りました関係各位に心よりお礼を申し上げます。

平成二四年十二月

出土したばかりの縄文土器が陽の光を受けて輝いている。  
約4500年の時間を越えて縄文土器と対面する。  
相模原市原東遺跡。

平成24年度かながわの遺跡展・巡回展

## 勝坂縄文展

02 縄文時代の日本列島×縄文時代のかながわ

04 うつくしき、勝坂

勝坂

勝坂いろいろ

有孔鏝付土器

土偶・顔

13 人間としての縄文人

うまい？へた？

縄文人のゴマカシ

16 縄文土器をつくる

19 我々は岡本太郎になれるか

岡本太郎の撮った縄文

22 コラム（現代人からみた縄文）

24 街頭インタビュー（縄文人に会ったら何を聞きたい？）

27 勝坂の歴史

公爵大山柏と勝坂遺跡

勝坂式土器の標式資料

32 国指定史跡勝坂遺跡のこれまで、これから

謝辞

凡例

＊本書は、平成二四年度かながわの遺跡展・巡回展「勝坂縄文展」の展示解説リーフレットである。  
＊本書の構成と展示の構成は必ずしも一致しない。  
＊展示会場と会期は次のとおりである。

神奈川県立歴史博物館

平成二四年十二月十五日～

平成二五年二月七日

相模原市立博物館

平成二五年二月十六日～

平成二五年三月二〇日

＊会期中、講演会、対談を次のとおり実施する。

平成二四年十二月二二日

講演会「勝坂遺跡と公爵大山柏」

講師 阿部芳郎 氏（明治大学教授）

神奈川県立歴史博物館 講堂

平成二五年二月二日

対談「縄文土器を考古学と美術史から語る」

講師 鈴木希帆 氏

（東京国立博物館アソシエイトフェロー）

千葉 毅（神奈川県教育委員会）

神奈川県立歴史博物館 講堂

平成二五年三月二日

講演会「縄文の造形と先史時代芸術」

講師 港 千尋 氏（多摩美術大学教授）

相模原市立博物館 大会議室

＊本展は、神奈川県教育委員会（埋蔵文化財センター）、

神奈川県立歴史博物館が主催し、相模原市教育委員会、博

物館・文化財保護課）が共催する。

＊本展の企画、本書の執筆、編集、ポスター・チラシ等の

デザインは、神奈川県教育委員会教育局生涯学習部文化

遺産課中村町駐在事務所「埋蔵文化財センター」の千葉

毅が担当し、大河内弘子、三戸芽、井上裕太が補佐した。

＊主催、共催機関の担当は、近野正幸（神奈川県立歴史博

物館）、正 洋樹（相模原市立博物館）、中川真人（相模

原市文化財保護課）である。

＊掲載写真は、一部を除いて担当が撮影した。提供を受け

たものは巻末に示した。土器の展開写真は、東京藝術大

学大学院映像研究科の協力を得て、担当が撮影した。

＊引用した図の出典は、巻末に示した。

＊掲載写真のうち、所蔵機関の記載されていない資料は、

神奈川県教育委員会所蔵である。

# 縄文時代の日本列島

# 縄文時代のかながわ

縄文時代っていつ？ どんな時代？ 今とちがう？

## 縄文時代

今からおおよそ12000年前、長く続いた氷河時代が終わった。従来は、それに伴い人間の文化が旧石器時代から縄文時代へ変わったと考えられていたが、最近の研究では氷河時代が終わる以前から縄文時代が始まっていることが明らかになりつつある。

まず、縄文時代の定義を確認しよう。研究者によって異なる部分もあるが、ここでは広く受け入れられている「縄文土器が使われ始めてから、稲作農耕を伴う文化（弥生文化）が成立するまでの時代」

と考える。現在のところ、

一番古い縄文土器は、青森県大平山元I遺跡から出土した

模様を持たない土器の小さな

かけらで、約16500年前

のものと考えられている。こ

のような土器が、数はまだそ

れほど多くないが各地で見つ

かされており、それゆえ氷河時

代が終わる前から縄文時代が

始まっていたと考えられてい

るのである。

神奈川県内では、やや時期

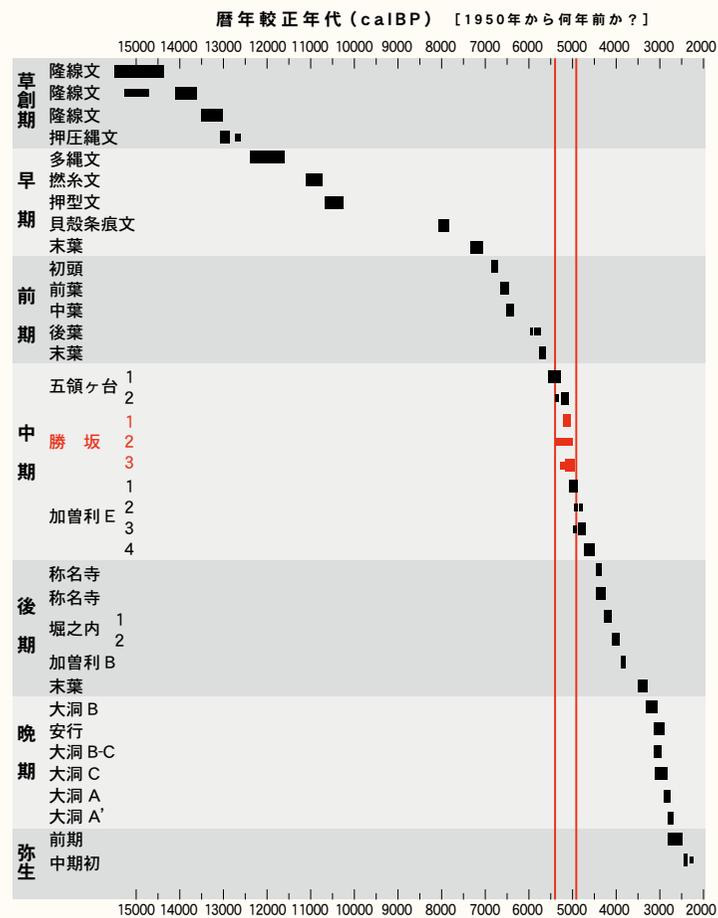
は下がるが、慶應義塾大学藤沢

キャンパス内遺跡（藤沢市）

でおおよそ14500年前の土

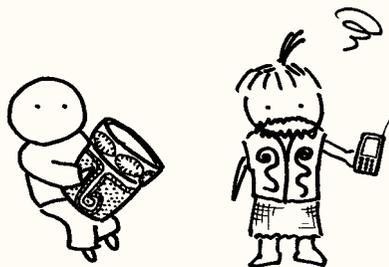
器を伴った生活の痕跡が見つ

かっているほか、本展のテー



\*横線が、各時代の推定される暦年較正年代の時間幅である。

炭素14年代法によって得られた数値を、暦の年代に較正した図。草創期から早期が圧倒的に長い。勝坂式土器は、おおよそ5000年から5500年前に相当する。



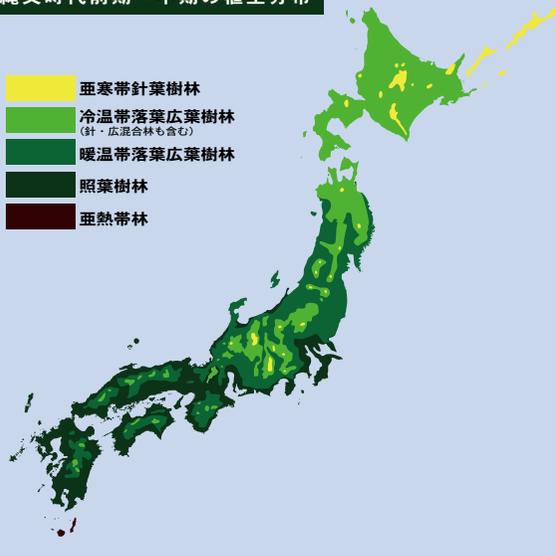
●勝坂縄文展へようこそ。縄文時代は1万年以上続いた長〜い時代。1万年って・・・キリストが生まれてから今日までの時間の5倍以上の間、ずっと縄文時代ってこと？長過ぎて実感が湧きにくい・・・



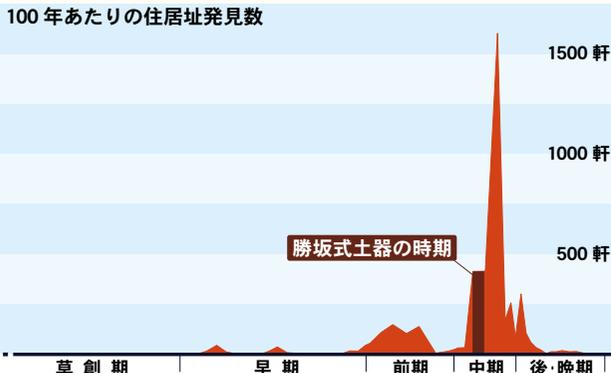
現在と気候が異なるため、植生にも変化がある。勝坂式土器の主に分布する範囲には、照葉樹林が広がっていた。

縄文時代前期～中期の植生分布

- 亜寒帯針葉樹林
- 冷温帯落葉広葉樹林 (針・広混合林も含む)
- 暖温帯落葉広葉樹林
- 照葉樹林
- 亜熱帯林



遺跡から発見された竪穴住居の数を、100年あたりの軒数に変換したグラフ。一律に増加したわけではなく、時期によって大きく変動していることが分かる。中期の後半に突出している。勝坂式土器の時期は、増加し始める直前の頃である。



縄文時代を特徴づける要素は他にも多くあるが、竪穴住居を作り、定住をはじめたのも大きな特徴である。住居をつくるための木材を伐採、加工するための道具も発達する。ただ、住居の数も時期によって大きな変動があり、単に段々と増えていったわけ

ではない(上図左)。長い縄文時代の間には、大きな気候変動も経験している。特に、6000年程前には温暖化などにより、3000年間で40m以上も海面が上昇した(下図左)。神奈川県域でも海岸線の多くは内陸へ入り込んだ(下図右)。

米はまだ作られていない。近年の研究で、縄文時代の稲作、農耕が取り上げられることがあるが、未だ証拠はとて

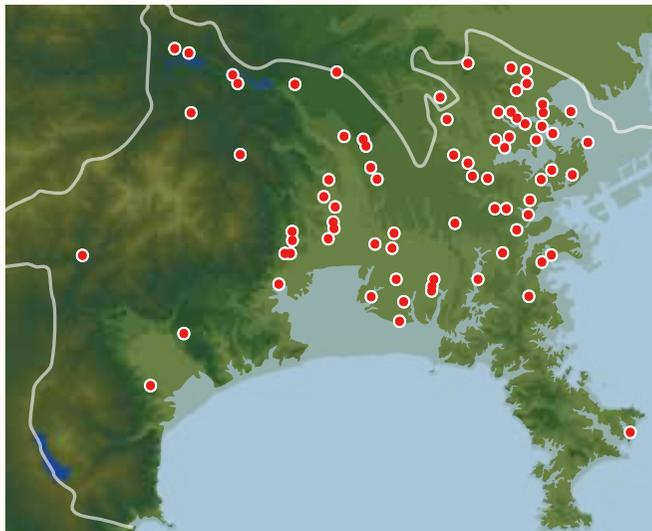
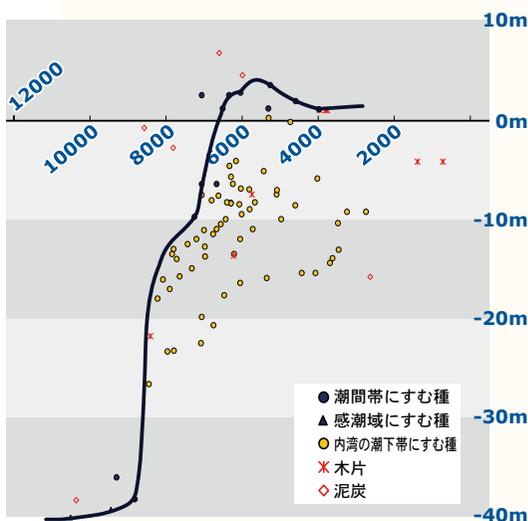
も弱い。ただ、縄文人が食用、木材として多用していたクリやクルミなどの樹木を、管理、栽培していたことは、花粉分析などから分かっている。縄文時代を特徴づける要素は他にも多くあるが、竪穴住居を作り、定住をはじめたのも大きな特徴である。住居をつくるための木材を伐採、加工するための道具も発達する。ただ、住居の数も時期によって大きな変動があり、単に段々と増えていったわけ

効率がよくなっただろう。米はまだ作られていない。近年の研究で、縄文時代の稲作、農耕が取り上げられることがあるが、未だ証拠はとて

も弱い。ただ、縄文人が食用、木材として多用していたクリやクルミなどの樹木を、管理、栽培していたことは、花粉分析などから分かっている。縄文時代を特徴づける要素は他にも多くあるが、竪穴住居を作り、定住をはじめたのも大きな特徴である。住居をつくるための木材を伐採、加工するための道具も発達する。ただ、住居の数も時期によって大きな変動があり、単に段々と増えていったわけ

効率がよくなっただろう。米はまだ作られていない。近年の研究で、縄文時代の稲作、農耕が取り上げられることがあるが、未だ証拠はとて

も弱い。ただ、縄文人が食用、木材として多用していたクリやクルミなどの樹木を、管理、栽培していたことは、花粉分析などから分かっている。縄文時代を特徴づける要素は他にも多くあるが、竪穴住居を作り、定住をはじめたのも大きな特徴である。住居をつくるための木材を伐採、加工するための道具も発達する。ただ、住居の数も時期によって大きな変動があり、単に段々と増えていったわけ



海面の高さの変化を示したグラフ(左)と、最も海面の上昇した段階の神奈川県域の海岸線を示した地図に勝坂式土器が出土した遺跡をプロットした図(右)。

●今日の温暖化でも海面が上昇して、太平洋の海抜の低い島に大変な影響が出ることが懸念されている。でも神奈川県も他人事じゃない。STOP 温暖化!



# うつくしき、勝坂



取っ手の付いたコップのような形。  
片手に収まるほどの大きさだが、非常に丁寧に  
作られており、内面も極めて平滑に仕上げ  
られている。取っ手は空洞になっている。

東京都日南田遺跡出土  
八王子市郷土資料館

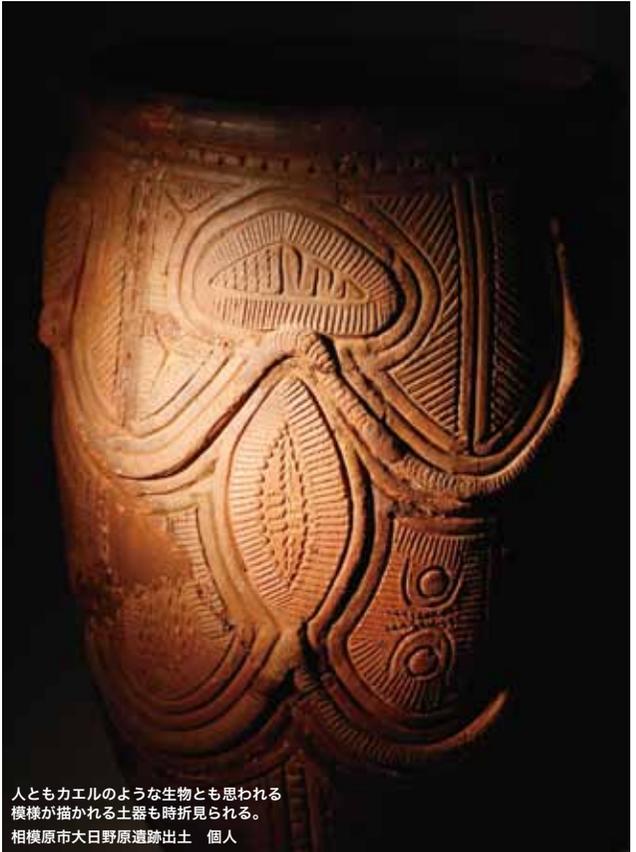


トロフィーのような形。台、取っ手が付く。あまり類例のない器形。海老名市杉久保遺跡出土 海老名市教育委員会

UFOか？顔なのか？今にもしゃべりだしそうな表情をした浅鉢。  
東京都御嶽堂遺跡出土 町田市立博物館



釣手形土器は、火を灯すための香炉などのような用途が考えられている。動物形の意匠や独特な模様が付けられることが多い。  
小田原市久野一本松遺跡出土 小田原市教育委員会



人ともカエルのような生物とも思われる模様が描かれる土器も時折見られる。  
相模原市大日野原遺跡出土 個人

縄文土器は、器形、模様、模様の構造などから様々に分類される。考古学では、分類された土器群を「型式」として把握し、それが縄文時代の時空間を語る際の大事なスケールになっている。それを大きな軸として遺跡から発見されるさまざまな現象の時期を決定し、議論するのである。縄文時代の草創期、早期、前期、中期、後期、晩期といった時期区分も土器型式を基準にしている。

通常、型式には、その特徴をもった土器が見つかった最初の遺跡、あるいは注目されるきっかけとなった遺跡の名前がつけられる。勝坂式土器は、縄文時代中期の土器型式の一つである。厚ぼったくて、重厚な様相は、多くの人が想像するような「ごてごてした縄文土器」のイメージによく似合う。大胆な模様が展開する一方で、繊細に描かれるものもあり、中でも生物を思わせる抽象的な意匠が多く用いられることも特徴的だ。

現代の感覚からすると、理解に苦しむような造形の世界である。

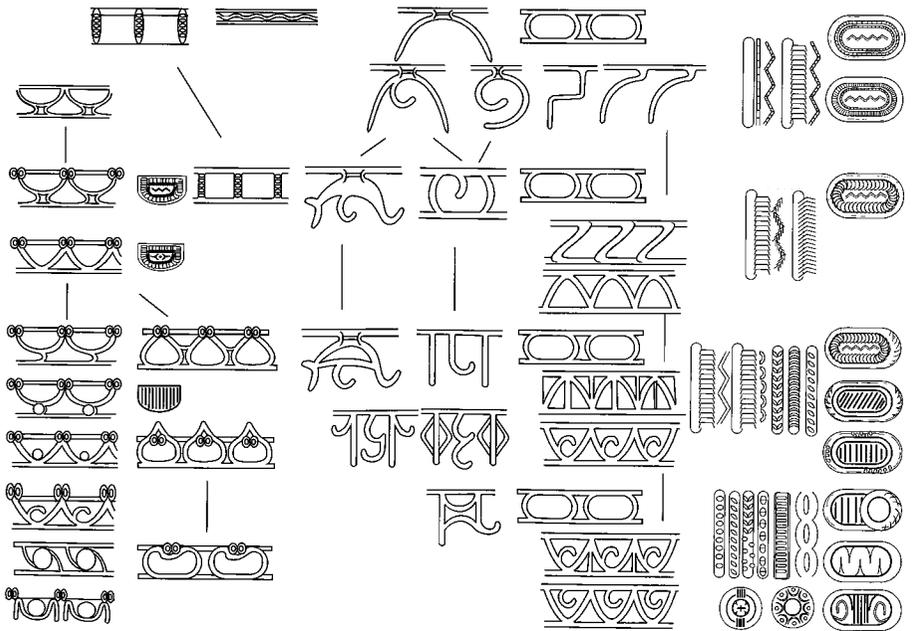
(勝坂遺跡の位置や、調査については三二頁以降を参照)

●「勝坂」の読み方。地元では「かつさか」って言っています。「かつさか」や「かつざか」って言ったりもするけれど、ここでは地元の人の呼び方にならって読んでいます。ちなみに最初に勝坂遺跡を発掘した大山柏先生は「かつさか」って読んでいたようです。



旧

新



勝坂式土器の模様、施文技法の変化を模式化した図。模様が多様に変化していくことが分かる。

勝坂式土器の特徴をもう少し詳しく見てみよう。

漠然と眺めると、似たような模様が多くみつかると、細かく見てみると、あまりの多様さに混乱してしまう。上図のように時系列に並べてみると分かりやすくなる。時間とともに描かれる模様が変化していることが分かる。一つの土器だけ取り出して見ると、いかにも独創性の塊のように見えてしまうが、実際には一連の変化の中で生まれた表現が多い。

また模様を描く方法（施文技法）も変化する。勝坂式土器には、粘土紐を貼付けて表面を立体的に区画する「隆帯」が多用され、それに沿って棒で描いた線（沈線）や刻み目の模様が描かれる。同じような刻み目であってもよく見ると「刻み・点の連続」なのか、「押し引き」か、わずかに異なることもある。実際に土器の模様を観察するときには、「模様を描いたときの縄文人の手の動き」を頭の中で復元しながら見てみるといい。

もう一つ、縄を転がした模様

（縄文）があまり使用されないことも特徴である。「縄文土器」という名称の由来にもなっている模様だが、勝坂式土器をはじめ、時期や地域によっては用いられないこともある。

勝坂式土器は、西関東、甲府盆地から諏訪、静岡県東部あた

りを大きな中心として分布している（左図）。同じ勝坂式土器でも地域によって細かな違いがあったり、近隣の土器型と融合したりして面白い。

なお、勝坂式土器が設定された経緯などは、二七頁以降を参照して欲しい。

## 勝坂マップ



勝坂式土器が出土している主な遺跡を示した。現在の神奈川県、東京都、山梨県、長野県に多く分布している。





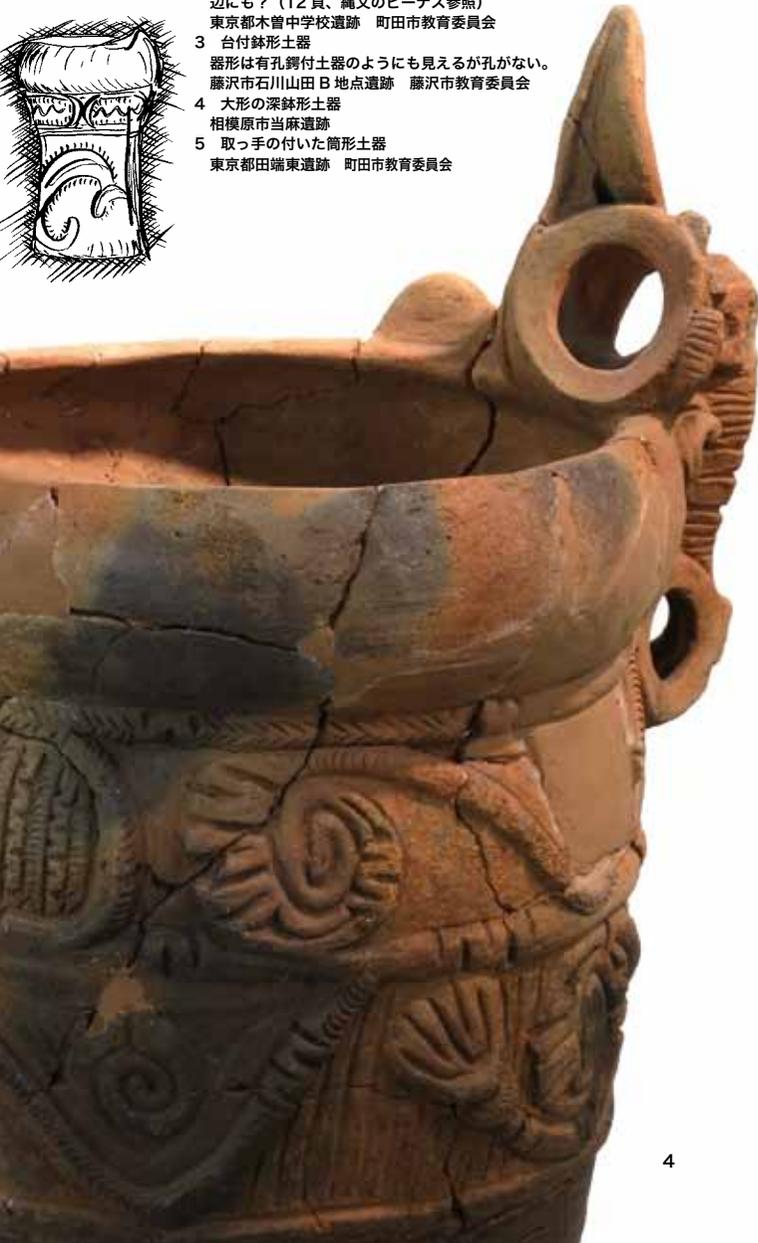
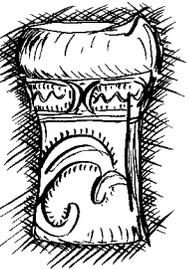
1



2

## 勝坂いろいろ

- 1 非常に手の込んだ小さな土器  
 掌に乗るほどの小ささだが、模様の描き方は非常に丁寧で、バランスも秀逸。同一の住居跡から出土している。同一人物による作かとも思ってしまう。  
 相模原市当麻遺跡
- 2 クルミ形の鉢  
 クルミのような珍しい形。見方によっては土偶の腰周辺にも？（12頁、縄文のビーナス参照）  
 東京都木曾中学校遺跡 町田市教育委員会
- 3 台付鉢形土器  
 器形は有孔鉢付土器のようにも見えるが孔がない。  
 藤沢市石川山田B地点遺跡 藤沢市教育委員会
- 4 大形の深鉢形土器  
 相模原市当麻遺跡
- 5 取っ手の付いた筒形土器  
 東京都田端東遺跡 町田市教育委員会



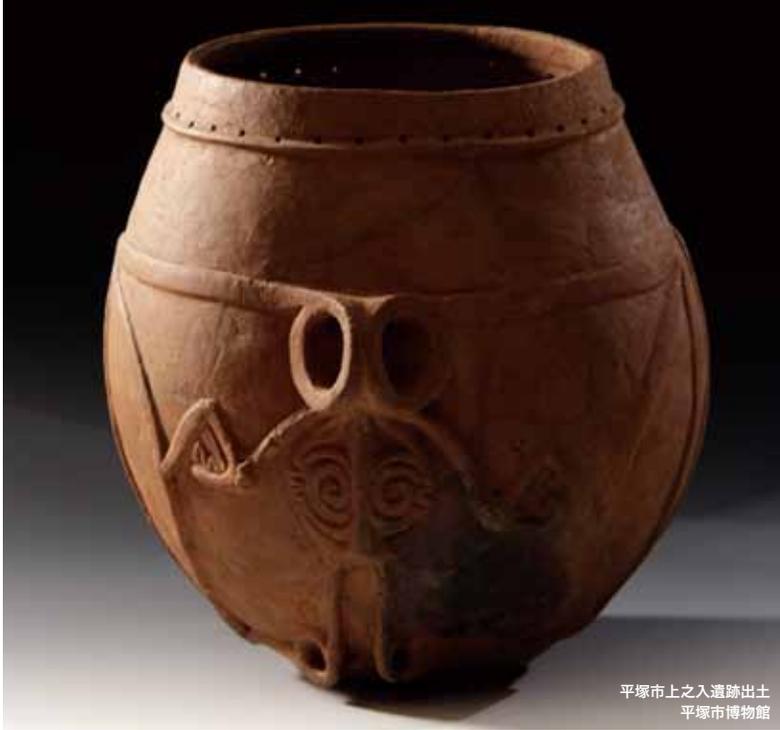
4



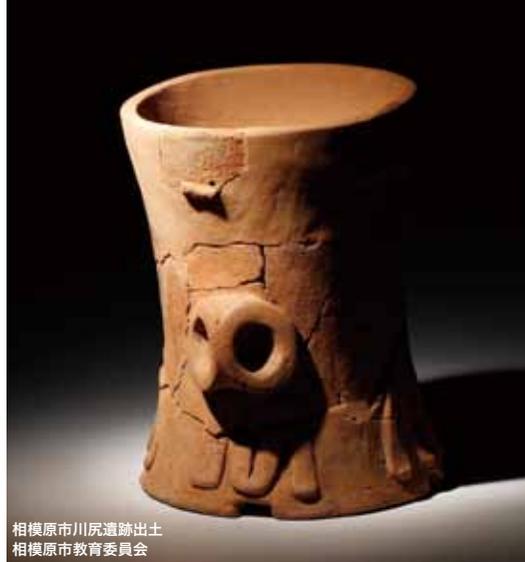
3



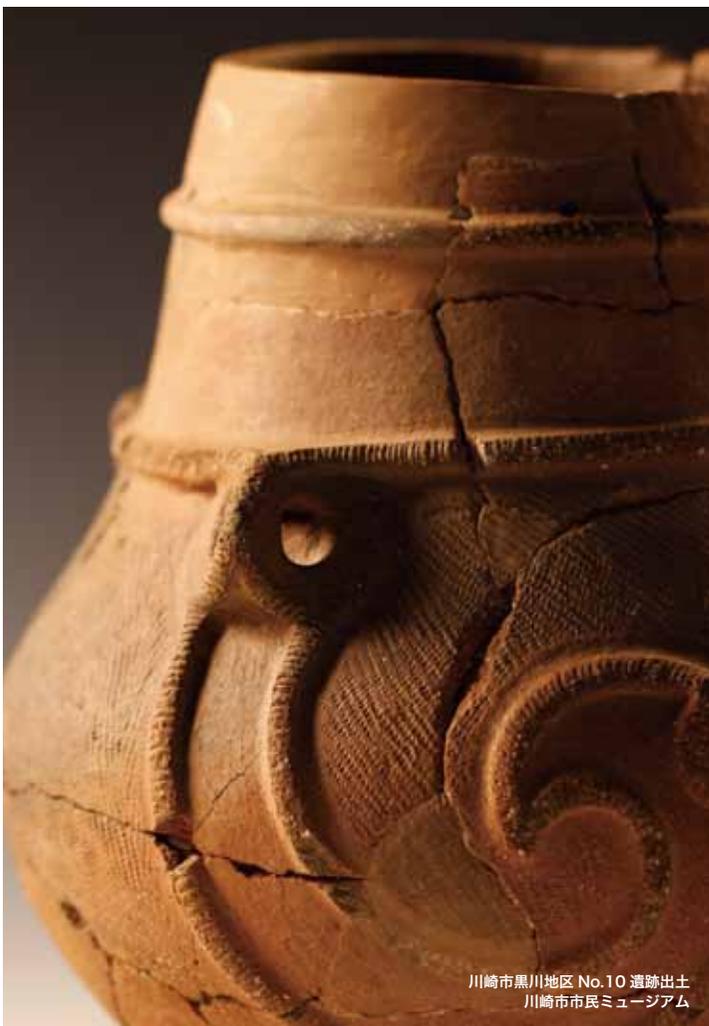
5



平塚市上之入遺跡出土  
平塚市博物館



相模原市川尻遺跡出土  
相模原市教育委員会



川崎市黒川地区 No.10 遺跡出土  
川崎市市民ミュージアム

## 有孔罎付土器

ゆうこうつぼつきど



縄文土器の一つの特徴に、口縁部に突起が付けられたり、波打ったりして平らなものが少ない点が挙げられる。その中であつて勝坂式に顕著に見られる特徴的な土器がある。口縁が平らでそのやや下方に小さな孔とそれに沿つて罎のような粘土紐が巡る、有孔罎付土器と呼ばれる土器である。

他の土器には見られない孔と罎の存在から、この土器には特別な機能が考えられてきた。革などを張つて音を叩き鳴らした太鼓説、蓋をして中で果実を発酵させ、孔はガス抜き用とした酒造器説が二大説となつている。しかし、いずれも賛否両論で結論は出ていない。確かに通常の土器とは形も描かれる意匠も異にしており、異質である。この土器を使つている絵でも見つかれば答えは出るのだからが・・・■

●有孔罎付土器って不思議な土器だ。僕は「虫かご説」を提唱します。だってよくカエルとかへびとかが描かれているから「中にカエルがいますよ」っていうことじゃない？





ヘビのような突起が付けられた土器  
 勝坂式土器には、カエルのような両生類生物の他、ヘビもたくさん描かれる。何か特別な存在だったのだろう。  
 神奈川県内各地

## 土偶・顔

縄文の造形といって忘れられないのは、土偶である。土器と同様、粘土で作られた。

勝坂式の土偶は、独特な表情をもっている。つり上がった目、ツンとした鼻、太い眉毛……。土偶はよく女性像だと言われることが多く、勝坂式の土偶も乳房やお尻の表現から女性と考えられるものが多い。しかし、勝坂式の土偶の表情は、どこか少年のようで、かわいらしいものも多い。

ユニークで親しみやすい表情を持つている反面、土偶には謎が多い。何に使ったのかもよく分かっていない。また、故意に破壊されているとよく言われる。しかし、実際に遺跡から出土する状況や、破片同士の接合関係などを細かく分析すると、そう簡単に「わざと壊されている」と言える状況でもなさそうだ。今後も多いに研究の余地がある。顔を表現した造形は、土偶以外にもある。特に勝坂式土器に特徴的にみられるのが、土器に付けられる「人面把手とて（顔面把手）」である。これは、頭の部分だけが土器の口縁に乗せられたもので、多くは土器の向こう側から、こちらを見ているように付けられる。基本的には土偶と似た作りだが、鼻が豚のように大きかったり、また作り方の差なのかと考えられるが、人面把手の頭はきれいな球の形をしているが、土偶はそれに比べやや扁平である点などは異なる。さらに、すべてに当てはまるわけではないが、土偶の頭は粘土が詰まっているが、人面把手の頭は空洞になっていることが多い。加えて、土偶のほとんどは顔がちゃんと描かれるが、人面把手には顔が描かれない「のっぺらぼう」がやたらに多い。

土偶と同様に、人面把手もその機能は分からない。土器に顔が乗っかっていることから、土器を「体」と見立てているのか。勝坂式土器には、また動物のような意匠も多く描かれる。中でもヘビは多い。カエルのような両生類もよくある。神聖視された動物たちを表現しているのだろう。 ■



中に土玉が入れられた土偶  
 振るとカタカタと心地よい音がする。用途はよく分からない。通常の土偶と違うのだろうか。現代の赤ちゃん用ガラガラみたいだ。ニヤけた表情もいいが、後姿もなんともかわいい。  
 東京都檜原遺跡 八王子市郷土資料館





巨大な頭  
首から下を欠いており、土偶の頭なのか、土器に付けられる人面把手なのか、分からない。  
中は空洞。高さ 17.7cm あり、頭を表現したものとしては、日本で最大級である。  
横浜市公田ジョウロ塚遺跡  
神奈川県立歴史博物館

●公田町出土のこの顔は僕のモデルです。人呼んで「縄文の貴公子」。  
なんて愛らしい表情なんだろう。かながわキンタロウ君にだって負けなぞ。





1



3a



3b

- 1 顔のある土器  
山梨県海道前 C 遺跡 山梨県立考古博物館
- 2 顔のある土器とない土器  
土器のつくりは非常に似通っているが、一方は顔が表現されない。  
左：東京都中原遺跡、右：東京都們田遺跡  
八王子市郷土資料館
- 3 顔なしの土器  
模様や形は1と似るが、こちらには顔がない。  
平塚市原口遺跡

右頁の写真は、勝坂式期の頭部資料。首の部分で割れていて、それ以下は失われている。横浜市栄区公田町から発見された。端正な顔立ちだ。目はきりつとつり上がり、少し開いた口元がいい表情を生んでいる。ちょっと盛り上がった鼻は子犬のそのように可愛らしい。頬や口の周りには、なにか幾何学的な模様が描かれている。髭や刺青などの表現のようでもある。耳にはピアスのような穴が穿っており、首元にもペンダントのようなものが見える。また表面がよく磨かれており、すべすべしている。後頭部は一部欠損が見られる他は、立体的な装飾や渦巻き模様が施されており、非常に手が込んでいる。

また忘れてはいけないこの顔の特徴は、「大きい」ことである。幅が約二〇cm、高さ約一八cm、奥行きは十五cmもあり、人間の赤ちゃんよりもだいぶ大きい。大きいことが良いことか分からないが、日本中で見つかったいる縄文時代の頭の造形の中では最大級である。

中身は空洞になっているものの、持ち上げてみると、ずっしりと重量感がある。実はこの資料は、なんなのかよく分かっている。首から下が失われているため、土偶なのか人面把手なのかも確定していないのである。土偶だとすると、気になるのは、頭が空洞である点、頸の断面も丸く空洞になる点である。頭は、他にも例があるが、頸が空洞になるものはほとんどない。人面把手の一種であろうか。しかし丸い断面の頸はどのようにして土器の口縁部と接続するのか分からない。さらにこんなに大きな頭が付けられる土器があったのだろうか。頭だけで通常の人面把手の倍ほどなので、土器の大きさも倍とすると、1m近い高さになってしまう。さすがに大きすぎるのではないかと思ってしまう・・・

結論はすぐには出てこない。そもそもなんでこんなに大きな頭を作ったのかも分からない。縄文人の考えることは、謎だらけである。■

頭は、他にも例があるが、頸が空洞になるものはほとんどない。人面把手の一種であろうか。しかし丸い断面の頸はどのようにして土器の口縁部と接続するのか分からない。さらにこんなに大きな頭が付けられる土器があったのだろうか。頭だけで通常の

土器の大きさも倍とすると、1m近い高さになってしまう。さすがに大きすぎるのではないかと思ってしまう・・・





1a



1b



2a



2b



1c

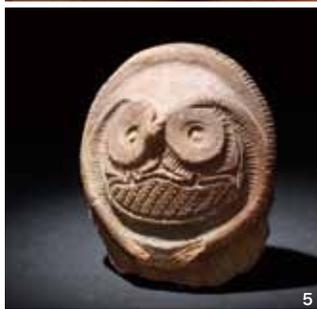
1a-c 土偶が乗った深鉢形土器  
口縁部に土偶が乗っかっています。  
相模原市大日野原遺跡 個人  
2a、b 土偶の頭 (a: 前、b: 後)  
ぼっかりあいた目口が宇宙人のよう。  
相模原市橋本遺跡 相模原市立博物館  
3 顔面の割れた人面把手  
割れた部分を見ると、もともとは顔面の表現  
があったよう。川崎市子母口富士見台 川崎  
市市民ミュージアム  
4 土偶の頭部 平塚市原口遺跡  
5 フクロウの顔を模した土器の突起  
相模原市大地開戸遺跡  
6a、b イノシシが乗っかっている土器  
山梨県安道寺遺跡 山梨県立考古博物館



3



4



5



6a



6b



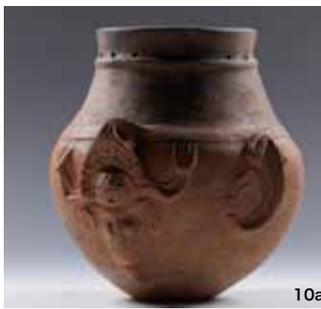
7



8



9



10a



10b

7 土器に付けられる土偶  
東京都小野路富士塚遺跡出土  
町田市教育委員会  
8 土偶  
山梨県石之坪遺跡 (西地区)  
蘆崎市教育委員会  
9 土器に付けられる顔  
相模原市当麻遺跡  
10a、b、c 人体のような意匠が  
描かれた有孔鈿付土器  
10c は、出土した状況。  
厚木市林王子遺跡  
厚木市教育委員会



10c

11 縄文のちび一なす  
ちいちゃな土偶。だけど顔もしっかり描  
いてあるし、おっぱいもある。  
山梨県諏訪原遺跡 北杜市教育委員会  
12 縄文のビーナス  
縄文造形の一つの頂点。まったく無駄の  
ないデザイン。半歩踏み出した表現も見  
事。国宝  
長野県榑畑遺跡 茅野市尖石縄文考古館  
(展示は複製品)



11



12

●日本中で発見されている土偶の数は、なんと20,000個以上とも言われています。ですが、すべての遺跡から見  
つかるわけではなく、土偶をたくさん持っていた集落もあれば、まったく持っていなかった集落もあったようです。



# 人間としての縄文人

私たちは、どんな時に「人間臭さ」を感じるのだろうか。

優美に作られたものや、真似できないほどの優れた作品を見たとき、私たちはもちろん感動を覚えることもあるが、時にはあまりにすぎ過ぎて、別世界のものだと思ってしまうことがある。むしろ、どこか「へたっぴ」だったり、失敗してしまったもの、あるいは失敗を「ゴマかした」ものなんかの方が「人間臭さ」を感じたりしないだろうか。

縄文人のそんな「人間臭さ」「生々しさ」を感じてもらえるような資料を集めてみた。



縄文土器のうまい？へた？  
同じような模様、構成をもった二つの土器。左の方が模様のメリハリがあって端正に作られているように見える。  
左：相模原市大地開戸遺跡  
右：秦野市鶴巻上ノ窪遺跡



補修のための孔  
ヒビがこれ以上進まないように、孔をあけて、両側から紐で結ぶ。  
相模原市大地開戸遺跡



そっくりに作られた縄文土器  
同じ住居から見つかった。大きさも、形も、模様の付け方、道具も同じものを使っているよう。同じ人が作った土器と考えたくなる。  
いずれも東京都多摩ニュータウン No.245 遺跡  
東京都埋蔵文化財センター

うまい？へた？

縄文人も人間である。器用な人もいれば不器用な人だっていたに違いない。几帳面な人もいい加減な人もいただろう。土器づくりにもうまい人、へたな人がいた。

私たちが見て、どんなものを「うまい」と感じるのだろうか。例えば、この頁の上段二つの土器であれば、模様のメリハリか。尖るところ、丸いところ。大胆なところ、細かなところが、左の土器は描き分けられているが、右のは、なんとなくどこも同じようなテンションで描かれている。また、模様の空間比率なども左の方がスタイリッシュに見える。

ただ、ここで注意しなければいけないのは、この感覚、視点はあくまで「現代人」のものである点である。これらの土器をみて、縄文人も私たちと同じように「うまい」「へた」と思ったとする確証はない。何かしらの違いを認識はするだろうが、それが「優劣」と見たかどうかは、縄文人と価値観を共有していない現代人には判断することは難しい。■





【参考】

どうしても欲しかったから、粘土で作っちゃいました  
翡翠は、新潟県糸魚川周辺でしか入手できない非常に貴重な石材である。翡翠製のペンダント（写真右）は当時からとても希少価値のあるものだったに違いない。写真左はそれを真似して粘土で作ったもの。よほどの憧れだったのか、形もそっくりである。

左：相模原市川尻中村遺跡 右：藤沢市石川山田C地点遺跡  
（参考）

縄文人の指紋？

土器の表面は、通常、磨いたり、撫でて平らにするため指紋が残っていることはないが、ごく稀に見かけることがある。上の写真は親指の指紋だろうか。波のような模様の部分にそれらしい痕跡が見える。下の写真は、粘土の塊の一部に、同様の模が見える。いずれも部分的で鮮明でなく、指の太さや性別などは判然としない。

上：東京都塚山遺跡 下：平塚市原口遺跡



なぜここにドングリが？

鉢の形をした土器の内側にドングリのはまっていた痕跡が見つかった。細かく見ると、内側表面の仕上げをした後にねじ込んだものが、焼成の際にはじけ飛んだ痕跡らしい。わざと入れたのか？ たまたま入ってしまったとか動物の仕業と考えるにはあまりにきれいな埋め込まれ方だし、こんなものが混入して気づかないはずがない。何か意図があると思えないが・・・しかもその場所が、外から見づらい屈曲した部分であることがまた思わせぶりである。なにかのサインなのだろうか。

相模原市大地開戸遺跡（参考は平塚市原口遺跡）



【参考】

ココの内側



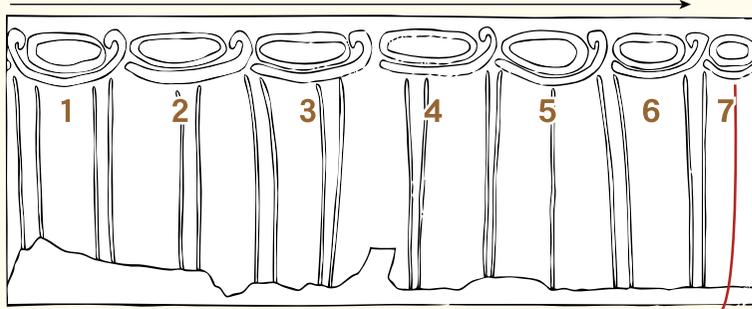
● 1878年イギリス人のヘンリー・フォールズ医師が来日、当時整理作業中だった大森貝塚出土の縄文土器を観察していた。そこで彼が土器に残された指紋を発見したことが、今日の犯罪捜査における指紋採取のきっかけになっているのである（たまには真面目なことも言う）。





中途半端エリア

描き始め



描き始め

中途半端エリア



7等分しなかった?

口縁下の楕円形の模様。描き始めから5個目くらいまでは大体同じ幅で描けているのに、6個目で「マズい、スペース足りない」って気づき、7個目は無理やり入れ込んでいる感じ。

綾瀬市早川天神森遺跡

\*この土器は縄文中期後葉の土器です。

縄文人のゴマカシ

立体である縄文土器に、万遍なく模様を描くには、頭の中であらかじめ割り付けが出来ていないとうまくいかない。同じ模様を繰り返すだけのデザインであっても、円周をピッタリに等分するのは意外に難しい。2単位や4単位であれば、上から見て半分、四分の一とすればいいが、もつと数が多いとなると、そうもいかない。

綾瀬市早川天神森遺跡出土の土器(上の写真)を見てみると、同じような楕円と波のような模様が七回繰り返されているのが分かる。しかし、よく見ると、描き始めから五個目くらいまではうまくできているが、六個目はやや幅狭になり、七個目は無理やり詰め込んだようである。同じように藤沢市葛原山田地区遺跡出土土器(下の写真)も、菱形の模様が描ききれず、ゴマカしたようだ。

これらが「失敗」なのか、最初からそこまで完璧なバランスを求めているなかったのかは即断できないが、こういった「やや不完全」な部分を見ると、ちよつとした人間くささを感じない? ■

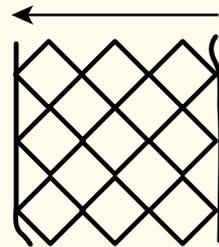


菱形がうまく描けなかった

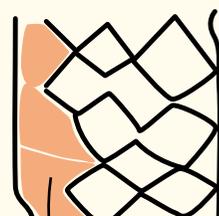
描き始めは区画の縦線とあっているのに、左に行くにつれて、菱形がぐにゃぐにゃやして上手くあわなくなってくる。最後は結局、中途半端エリアができてしまい、ゴマカしたような模様をはめ込んでいる。

藤沢市葛原山田地区遺跡 藤沢市教育委員会

ここに注目



縄文人の理想



縄文人の現実

中途半端エリア



# 縄文土器をつくる



焼成中の縄文土器。  
相模原市土器づくりの会の製作による。

## 土器をつくる

縄文土器はどうやって作ったのだろうか。今回、本展覧会のために、相模原市教職員互助会同好会土器づくりの会（相模原市土器の会）にご協力いただき、縄文土器を復元製作した。

製作のモデルにしたのは、1926年に行われた最初の勝坂遺跡発掘調査で出土した深鉢形土器である（28頁参照）。原品は戦災で失われてしまっているため、残された図面と写真から寸法を計算した。その他、有孔罎付土器も製作した。

形づくりから模様の仕上げまでは八月下旬に行った。粘土は市販のテラコッタ粘土を用い、焼成時の破損防止のため、砂を混ぜる。粘土をこね、縄文時代と同様に輪積みによって形をつくっていく。朝から作業を始めて、昼過ぎに形が出来上がった。午後は模様を描く。今回は、モデルを忠実に再現することを目指したため、図面、写真を細かく観察し、描く道具を選びながら模様を再現した。

午後六時頃、模様の仕上げま





で完成した。この後は、土器を乾燥させる。粘土に余分な水分が含まれていると、焼き上げる際に急激な温度変化によって破裂してしまうのである。日陰で二ヶ月程ゆっくり乾燥させる。

焼成は十一月三日に開催された「勝坂縄文まつり」に合わせに行った。朝八時半頃から空の焚火をして、地面を乾燥させる。その後、二ヶ月かけて乾燥させた土器を段々と火に近づける。ここでも急激に火に入れてはいけない。昼食の時間が近づいてきた頃、やっと土器の周りに井桁状いげたに薪を設置し、本格的に焼き始める。この頃からは炎が大きく燃え盛り、見ている方も胸が高鳴ってくる。肌寒い十一月でも火の周りはとても熱く、見学がてら焚火にあたりにくる人も多くいる。午後一時半にもなると、薪は焼け崩れて赤くなつた土器の姿が見えてくる。そのまま焼き続け、三時頃には熾火おきびのようになった火の中から長い棒を使って土器を取り出す。これでようやく完成である。焚火から出しても、夜まで土器は冷め切らず、温かった。■



# 縄文土器をつくる



土器の底に葉っぱの痕跡  
土器を作る際に敷いた痕跡だろう。  
作り終わったあとに、磨り消される  
ことが多いが、これはきれいに残っ  
ている。  
相模原市川尻遺跡



編物が焼きついた土器づくりの台  
上面が黒く焦げており、そこに編  
物が焼け付いている。この台ごと  
焼いたのだろうか。  
相模原市橋本遺跡  
相模原市立博物館



編物の痕跡  
土器づくりで余った粘土を焼  
いたものか？くっきりと編物  
の痕跡が見える。  
相模原市川尻遺跡



土器づくりの台  
透かしの部分に刻み目の模様  
が付けられている。  
東京都橋原遺跡  
東京国立博物館



製作工程の復元  
東京都神谷原遺跡  
八王子市郷土資料館



## 縄文土器づくりの工程

### 焼成

2、3ヶ月かけて乾燥  
させてから焼成する。  
窯はまだなく、野焼き。  
温度は600～800  
度程。弥生土器も基本  
的には同様の焼き方。

### 施文

縄を転がしたり、棒で  
線を描いたり、粘土を  
貼り付けてみたり。縄  
文時代の間にも手法が  
様々に変化する。勝坂  
式土器には縄目模様  
(縄文)が少ない。

### 成形

粘土の輪を積上げて成  
形(輪積み)。長い粘  
土紐を巻き上げるこ  
とはほとんどない。小  
さな土器は手で捏ねた  
だけのも。ろくろは  
まだない。

### 生地づくり

地面に叩きつけたり、  
踏んだり、捏ねたり。  
練ることで空気が抜  
け、粘性が高まる。粘  
土が均質になるよう  
にする。混和材も混ぜ  
合わせる。

### 原料の採取

土器づくりに適した粘  
土と混ぜ合わせるため  
の砂などを用意。東  
京都多摩ニュータウ  
ンNo.248遺跡では、  
大規模に粘土を採掘  
した跡が見つかって  
いる。



土器づくりの会が使用している、土器に模様を描く道具  
太さ、形、硬さなど様々な種類がある。縄文時代の道具箱も  
こんなだったのだろうか。



# 我々は岡本太郎になれるか

岡本太郎が亡くなって、16年が経った。昨年は太郎生誕100周年だったことから、大規模な展覧会が開催され、各種メディアでも多くの特集が組まれた。その中で岡本太郎が縄文土器に出会い、驚き、世界の眼を縄文土器に向けさせたことも少なからず取り上げられた。

太郎は縄文土器に出会い、遠い過去の日本列島に生きていた縄文人の激しいまでの造形こそ日本の伝統だと訴えた。しかし、太郎の主眼は回顧ではなかった。もちろん、縄文土器、縄文時代そのものにも興味があった。特に違いはないが、むしろ太郎のな



1952年2月発刊『みづゑ』  
岡本太郎が初めて縄文土器に関する文章を発表した。

かで重要だったのは、その純粋な力強さをいかに「日本の伝統」として現代に息衝かせるかであった。

「縄文土器がどんなにすばらしいとしても、過去のものです。われわれが今日の現実と直面して、それ以上にはげしくたくましく生き、その表情を芸術のうえに打ち出すのでなければ、なんの意味もないのです」  
これは、太郎の言う芸術に限らず、考古学も含んだ歴史学一般にも言えることだろう。私たちが縄文時代のような過去のことにどれだけ精通しても、それが現代社会とあまりに無関係な「過去のお話」でしかなく、現代人の描くユートピアを反映し



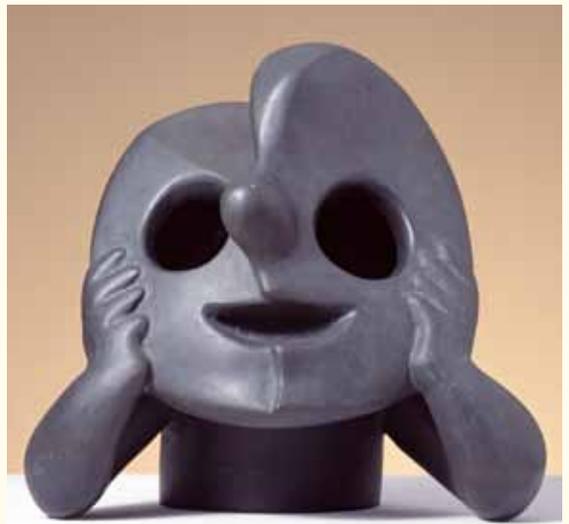
1956年9月発刊『日本の伝統』  
『みづゑ』の文章をベースにし、  
あらためて太郎の縄文土器論「縄文土器—民族の生命力」を発表。

ただけのもののだとしたら、あまりに寂しい営みになつてしまう。

私たちが過去と向き合うとき、意識する、しないに関わらず、どこかで現代に生きる自分たちと比較をする。縄文時代のような遙か昔と向き合おうものなら、現代的感覚、常識との違和感を抱くことだけである。しかし、その違和感を無視せず、現代社会の「常識」に改めて目を向け、考えるきっかけに出来たなら、太郎のように縄文の力を現代に打ち出すことができるのかもしれない。■



顔VI 1970  
川崎市岡本太郎美術館



午後の日 1967  
川崎市岡本太郎美術館

●太郎さんは、取材で職業を聞かれたとき「しいて言うなら職業は人間だ」って答えたらしい。縄文人ならなんて答えるだろう。職業はないかもしれないけど。





1956年撮影



1956年撮影



山梨県出土  
東京大学総合研究博物館

海底の神秘と、密林の迷路。  
その分厚な表情がにおい出る。  
それらの深みをくぐり抜けてゆく、  
驚異的な空間性。

『日本の伝統』1956年



山梨県穂坂小学校（飯米場）遺跡出土  
東京国立博物館

## 岡本太郎の撮った縄文

岡本太郎は、1951年東京国立博物館を訪ねた際に、偶然縄文土器を目にする。そこで彼は日本列島にこんなとんでもないものがあつたことを知り驚愕するのである。彼はその想いを翌1952年に発表し、縄文土器にこれまでとは異なつた視点を、世間に対し提供したのである。

「とくに爛熟したこの文化の中期の美観のすさまじさは、息がつまるようです。つねづね芸術の本質は超自然的なはげしさだと言つて、いやつたらしさを主張する私でさえ、思わず叫びたくなる凄みです」

それからというものの、太郎は様々な場所へ出向き、縄文土器を撮りまくつた。考古学関係の機関に無理矢理なお願いをし、だいぶ面倒くさがられたようである。

太郎が撮つた縄文土器の写真を見ていると、全体像を写したものも多いが、同じくらい、一部分に接近して拡大した写真が多いことに気付く。特に、模様がぐるぐると渦を巻いている部分や、ぐにゃ



1956年撮影



1956年撮影



岡本太郎が撮影した資料の中で、唯一の神奈川県内出土。  
横浜市稲荷山貝塚出土  
東京国立博物館



富山県朝日貝塚出土  
東京大学総合研究博物館

ぐにや曲がっていたりする部分を拡大していることが多い。また、太郎が撮った土偶などを見ると、非常にその土偶の表情が生きる角度を狙って撮っている。今でこそ、縄文土器や土偶に、凝ったライティングをして、表情をつけた写真は珍しくなくなったが、そのような写真が受け入れられるきっかけを作った一つの大きな要因が太郎の写真であることは間違いない。ただ、太郎は芸術写真としての縄文写真を求めたわけではなく、「自分の中に縄文を取り込んでやる」くらいの気概きがいで、縄文土器と対峙しているようである。

確かに、縄文時代は自然の中に人間が生き、ある程度の共存関係が築かれていただろう。しかし、だからといって盲目的に「昔はよかった」と言っているだけでは、何も変えることはできない。

「古いものをカサにきて、現実を侮辱するなんて、これくらい非伝統的であり、人間として卑怯なことはありません」

私たちが、太郎から教わることは、まだまだたくさんある。 ■

縄文土器の手ざわり

桐山孝司(東京藝術大学大学院映像研究科 教授)

神奈川県立歴史博物館の斜め向かい、旧富士銀行の建物に東京藝術大学大学院映像研究科がある。その近さにもかかわらず、博物館の考古学研究室は、我々が想像したこともない世界だった。発掘された遺物が収められた箱が壁面一杯に並び研究室で、何千年かの時を経た土器には圧倒的な存在感があった。

研究室の机に置かれた縄文土器は、見かけの厚ぼったさからは意外なほど薄く器用に作られている。中ほどがわずかに細くなった円筒形をしていて、弓なりにしぼられた輪郭が手になじみやすい。胴には細かい縄目模様があり、木の幹のような摩擦を感じる。



きりやま・たかし ● 1964年生。東京藝術大学大学院映像研究科教授。工学博士。専門は映像メディア学、創造支援環境。勝坂縄文展では同研究科の木村稔助教とともに展示と照明の技術協力を行った。

今をさかのぼること数千年と聞くと、たいてい人は頭がぼおつとしてしまう。とても手の届かない遠い昔。現在とは似ても似つかない生活。だがある日、わたしは少なくともひとつだけ、変わらない何かがあるのかも、と思つた。それは博物館の学芸員が、縄文土器を手に持つてクルクルと回し、紋様に指で触れながら話をはじめた瞬間だった。

この土器を作った人の手も、こんな手ではなかっただろうか。それを使っていた人も、こんな風に土器を抱えていたのではないか。そして数千年前の地層から、この土器の破片を掘り出したのも、人間の手だった。



写真集「掌の縄文」はこうして生まれました。土器を持つてもらい、それを撮影してゆくと、ガラスのケースに閉じ込められているのとは違った、独特の表情が出てくる。土器を掘り出し、破片を洗い、番号を付け、器用な手つきで復元する手は、数千年前の世界にこの土器をもたらした誰かの手と、この器を介して出会う。

精神の道具

港千尋(多摩美術大学 教授)

みなと・ちひろ ● 1960年生。写真家、著述家。多摩美術大学情報デザイン学科教授。「記憶」や「群衆」などをテーマに多くの作品を発表している。著書・写真集とも多数。近刊に「芸術回帰論」(平凡社新書)「ヴォイドへの旅」(青土社)など。



『掌の縄文』(羽鳥書店) 人の手に抱かれた縄文土器・土偶の写真集。2012年3月刊

●桐山先生が土器にあげられた孔(13頁参照)を見て「この孔は、土器を作る人があげた気がする」って思ったのを聞いて、すごく納得してしまいました。確かに、自分で作れない土器の模様ど真ん中に孔をあけるのは、ためらってしまう気がする。自分の絵に落書きできても、自分で描けないような作品には落書きできない。





もちづき・じゅん ● 1984年生。16歳でドラムをはじめ、ジャンルに捉われず様々な音楽活動に参加。2009年からは山本秀夫氏にアシスタントとして師事し、4年弱の修業期間を経て2012年11月から自身の活動を再開。

今回、縄文鼓の演奏を依頼されたとき、初めて聞く響きにとても興味をもったのを覚えています。縄文土器の多くのものは縄目の模様が施され、口の部分が少し変わった形をしています。しかし中には、口の部分が平らでその周りを囲むように穴が空いているものがあります。その土器の使用用途の一つとして太鼓という学説が挙げられているそうです。

はじめ私は土で出来た器の音がちゃんと響くのかどうか疑問をもっていました。ですが、復元した土器を叩いてみると聴いたことのない響きがしたのです。これは面白いことになるかもしれないと感じました。準備の段階で、発掘された縄文土器を実際に手にしたときには、今から5000年も昔の方々と本当に繋がれるような気がして、彼らのメッセージでも聞こえるのではないかと興奮を覚えました。

それらが太鼓として使われていたかどうか本当のところは分かりませんが、ただ、当時から音を楽しむための楽器というものは必ずあったと信じています。

今回の展覧会が現代に生きる私達と縄文時代の人々との架け橋であるのと同様に、今回の演奏が古代の人々の心を今に伝え得ることを願って自分なりの縄文鼓を鳴らしてみたいと思います。

## 縄文の音 × 現代の音

望月 純(ドラマー)

\*望月さんの演奏による「縄文ミニコンサート」は2012年12月24日に開催します。

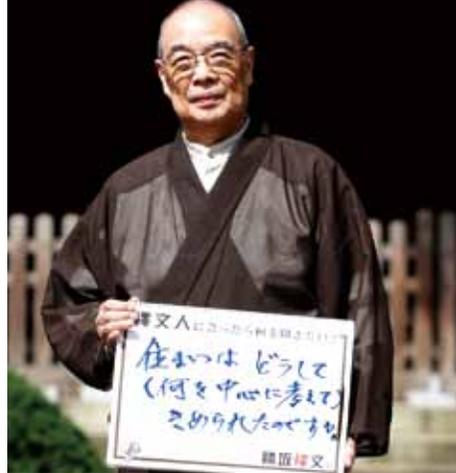
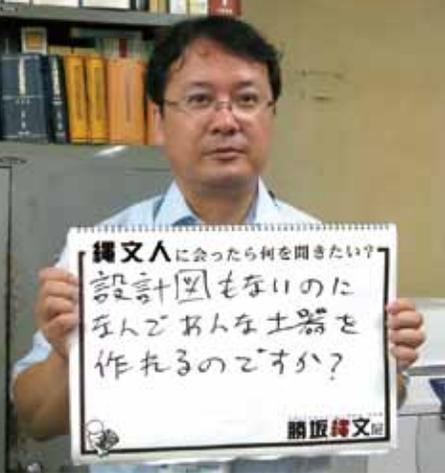


## 街頭インタビュー

街で、神奈川県庁で、勝坂遺跡公園で・・・聞きました！！

# 縄文人に会ったら何を聞きたい？





# 街の素朴な疑問に、考古学は果たして答えられるのか。

現在の考古学では答えられないことが、まだまだたくさんあるのです… (むしろ分からないことだらけ)

(分からないことは架空の縄文人さんに答えてもらいました)

<p>Q 家のこだわりを教えてください。</p> <p>A 縄文時代の家は、地面を掘りくぼめた竪穴住居です。中期の神奈川・関東周辺では、4～6本の柱で屋根を支え、土器や石で囲った火床を備えた家が多かったようです。平面形は丸いのが主流ですが、角の丸い四角形をしたものもまみられます。</p>	<p>Q 食べて「失敗した！」と思った生き物は？</p> <p>A フグ毒で亡くなった縄文人はいたようですが、「失敗した」と思った時にはもう死んでいたでしょうね。 縄文人は食べ物にかなり貪欲で、陸獣はもちろん、魚、貝、木の実なんでも食べます。ウニも！アワビも！</p>	<p>Q 結婚式のご予算は？シカ何頭分？</p> <p>A まったく分かりません。みんなで集まってお祝いしたんでしょうか。お酒があったという説もありますが、よくわかっていません。でも肉料理は当てもご馳走ですから、お祝いときはシカも食べたんじゃないかと思えます。</p>
<p>Q 趣味という考えはあったのでしょうか？</p> <p>A もちろん楽しみはあったでしょう。他の狩猟採集民族の例をみると、個人で楽しむものよりも、みんなでおしゃべりしたり、歌を歌ったりといったようなことが多かったようですね。</p>	<p>Q 得意料理はなんですか？</p> <p>A (縄文人) 「色々ありますが、やっぱりこの季節は鍋料理！肉も魚も貝も・・・。温かい煮込み料理は軟らかいし、寒い時期にもぴったりなので爺ちゃん婆ちゃんからも大好評です」</p>	<p>Q 元気ですか？恋してますか？カエルはいますか？</p> <p>A (縄文人) 「猟がうまくいかず凹むこともあります。元気です。恋します (多分)。カエルもいます」</p>
<p>Q うさぎ食べてましたか？</p> <p>A うさぎさんには残念ですが、かなり捕っています。柔らかな毛皮にも需要があったのでしょうか。また異種で安全に捕れるというところも大きなメリットだったかも知れません。</p>	<p>Q お弁当は肉、魚、野菜 何が好きですか？</p> <p>A 携行食品と考えると、腐るものは嬉しくないでしょうね。肉なら干肉、魚なら塩漬(重い)、野菜ならいにかもしれませんね。 内陸部で入手にくい干貝なんかは、海岸部から流通していたようです。</p>	<p>Q 名前教えて</p> <p>A 文字のない縄文時代。遺跡から人の名前が見つかることはまず絶望的です。もちろん名前はあったのだと思います・・・ もし会ったらなんて呼べばいいんでしょうか。</p>
<p>Q 設計図もないのになんであんな土器を作れるのですか？</p> <p>A 未だに多くの研究者を悩ませている疑問です。なにか絵描き歌のようなものがあつたとか、物語に合わせて描いてるんじゃないかとか言われますが、なかなか証明が難しい！</p>	<p>Q 結婚相手の決め手は？</p> <p>A 为什么呢。男だったらやっぱり、ちゃんと食糧を自力で獲得できるとか、村での信頼があるとかになるんでしょうか・・・ かっこよさも大事か！？</p>	<p>Q 住まいはどうして (何を中心と考えて) きめられたのですか？</p> <p>A 駅近よりも川や水辺の近くに村を構えることが多かったようですが、南向きの日当たりのよい立地が好まれるのは今も昔も変わらないですね。</p>
<p>Q けんかしたらどうしますか？ どうやってなかなおりますか？</p> <p>A (縄文人 A) 「何もなかった顔をする」 (縄文人 B) 「謝る」 (縄文人 C) 「ムカつくから相手が作ってる土器にドングリねじ込む」 (縄文人 D) 「引越す」</p>	<p>Q 視力いくつ？</p> <p>A 難しいです。東アフリカのマサイ族は 8.0 くらいあるといいますが、同じ採集狩猟民でも環境が大きく異なり縄文人との比較は困難です。ただ、マサイ族の視力も文化的なもので、都会で暮らすとかなり下がるようです。</p>	<p>Q どこまでがあなたの領土ですか？</p> <p>A (縄文人) 「だいたい数日で行って帰った来られるくらいだな。あんまり遠くへ行って、隣のムラと獲物の取り合いになっちゃうのも嫌だからな。まあ獲物だって土地だって神様からいただいたものだからほんとは誰のモノでもないじゃないの？」</p>
<p>Q 私を仲間に入れてくれますか？</p> <p>A (縄文人) 「一つの集団の中にもルーツの異なる人々がいました。けっこう厳しい(?)通過儀礼もありますが、覚悟があるならぜひ、お嫁にきてください」</p>	<p>Q 生活は大変ですか？</p> <p>A (縄文人) 「猟や魚とりは、経験とか勘の必要な肉体労働ですが、わりと楽しく生きてます。みんなで木の実拾いに行くのもおしゃべりができて好きです」</p>	<p>Q 火焔土器はどのようにして作ったのか？最初に作った人の顔が見たい。</p> <p>A 一個だけ見ると、とっても個性的な火焔土器も、一昔前にあった土器の模様や形がちょっとずつ変化してきたもの。でも本当になぜこんなに装飾がエスカレートしていったのだろう。芸術家みたいな人がいたのか。</p>
<p>Q おふろはどうしたの？</p> <p>A あつたかいお風呂はありません。川や水辺で水浴びのような感じだったのでしょか。ただ、温泉が自然に湧き出ている場所なんかは縄文人も知っていたかもしれませんね。</p>	<p>Q 土偶の役割はなんですか？儀式のときにどういう風に土偶を使ったの？女の人がつくったの？</p> <p>A (縄文人 A) 「安産のお守り」 (縄文人 B) 「眺めてまったりする」 (縄文人 C) 「猟に行くときのお供」 (縄文人 ども) 「かみさま！」</p>	<p>Q 現代犬「わたしのようなペットはいましたか？」</p> <p>A (縄文人) 「わん (みんなにかわいがってもらってます。猟の手伝いだってするよ!!)」 縄文人は現代の小型の柴犬程度の大きさだったようです。ちゃんと埋葬されることもありました。</p>



縄文中期の遺跡から多く見つかる打製石斧。土を耕すための道具じゃないか  
と考えた研究者から、これまで何度も縄文農耕論の根拠の一つとして取り上げられてきた。  
相模原市大地開戸遺跡



# 勝坂の歴史

# 公爵大山 柏と勝坂遺跡



1926年の勝坂遺跡発掘調査に関連する数少ない資料。今回の展覧会で復元製作した土器のモデルでもある。下は、裏面の記載。個人



大山 柏。1932年5月、横浜市菊名貝塚にて。個人



大山史前学研究所で使用していた発掘機材。熊手やスコップは特注品。個人

1926年、勝坂遺跡がはじめて発掘調査された。調査を行った大山柏は、陸軍軍人の大山巖とその妻捨松の息子である。長男が、演習中の事故によって亡くなったことから柏が、その爵位を継ぎ、公爵となった。

1889年生まれの大山は、二〇代頃から考古学へ関心を持ち、独学で調査を行い、それに関する書籍を刊行するなどしていた。そんな中、1923年にベルリンへ公務で留学することとなり、彼は公務のかたわら、ベルリン史前史博物館に出向き、フリーベルト・シュミット博士らに考古学を学んだ。

1925年、帰国した大山は、青山の自邸内に「史前研究室」を設立し、留学中に収集した文献や、各地の出土品を保管するための施設を用意した。また、そこでの活動は、史前研究会として行われるようになった。彼の言う「史前」とは、概ね「先史」と同義で文字資料が出現する以前の段

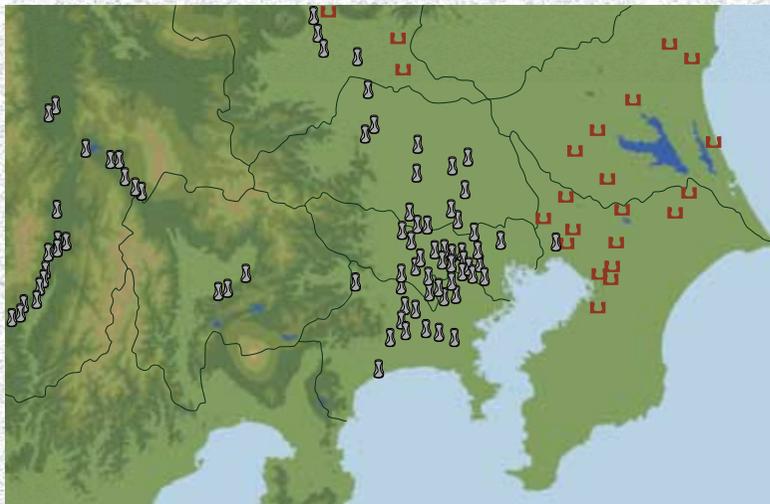
階を示している。彼の研究方法は、あくまで史前文化全体の理解に向いていることが特徴で、個別の遺物研究もさることながら、多彩な民族例やドイツ留学時代に得たと考えられる種々の概念が用いられる多角的な分析が多い。

そんな大山が、ドイツから帰国した後、最初に調査したのが1926年の相模原市の勝坂遺跡なのである。

しかし、この調査によって得られた資料は、戦災により失われてしまっており、刊行された報告書を除いてまったく残っていない。報告書によると、調査はわずか一日行われただけであるが、多くの土器と、打製石斧、また人面把手が出土している。

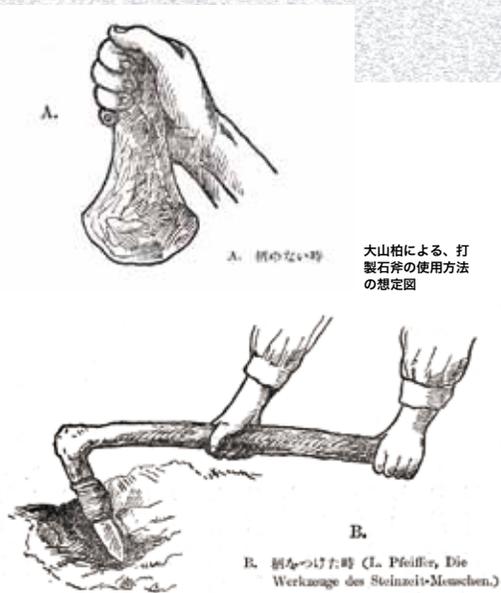
大山による報告書で注目されるのは、縄文時代の農耕についてである。大山は、打製石斧が多数出土したことから、これらについての分析を試みる。形態の分類ももちろん行うが、それに加えて、多くの民族例から使用方法、機能の





打製石斧が多く見つかった遺跡との分布と貯蔵のための穴の分布。きれいに分布が分かれる。

**打製石斧が多量発見された遺跡**  
**貯蔵穴が密集して発見された遺跡**



大山柏による、打製石斧の使用方法の想定図

B. 柄杓につけた時 (L. Pfeiffer, Die Werkzeuge des Steinzeit-Menschen.)

推察が行われ、打製石斧を「土掻き」と考える。そこから「土掻きあるとすれば、原始農耕の存在は可能である」と考えたのである。

打製石斧を土掘り具とした研究は、その後も多く行われている。上段の左図は、東京大学今村啓爾によって示されたものである。貯蔵の穴を持つ遺跡と、打製石斧が多く出土する遺跡の分布が顕著に分かれている。貯蔵の穴は、堅果類を貯蓄するための施設だとする考えからすると、その補完的な分布を示す打製石斧も食料調達に関する石器と考えられる。今村は、このようなことから、打製石斧をジネンジョ（ヤマノイモ）を掘るための道具と考えた。

芋自体が遺跡から見つかることは望めない以上、現状では、それに伴うと考えられる「状況証拠」から推察するしかない。大山の研究は、様々な角度からそれを試みた端緒となるものであった。■

勝坂遺跡出土の人面把手。大山はこれを非常に気に入っていたようである。



窓状の土出手段面柄

1932年、ハノイで開催された第1回極東先史時代会議の要旨。

"Katsusaka" の文字が見える。個人

Typus bisher gebrauchte Nam (eramik), ist in Japan allger zu bezeichnen; darum haben von Katsusaka 勝坂 beim I in « Katsusaka Typus » verä e-shiki » 薄手式 (= dünn hem Grunde nach dem Mu

大山柏の著書の裏表紙。勝坂遺跡出土の人面把手を研究会のロゴとして使用している。



大山柏の著書。勝坂遺跡の資料が多用されている。





\*所在不明

\*所在不明

\*所在不明

## 勝坂式土器の標式資料

勝坂式土器は、1940年、日本先史学の泰斗、やまのうらすがお山内清男によって設定された土器型式である。彼は勝坂遺跡出土の土器の一部とともに当時知られていた縄文時代中期の資料を加えて15点の土器を勝坂式の典型として鮮明な写真図版で示した（上段）。しかしその後、太平洋戦争の混乱の中で、一部の資料は戦災により焼失、写真も多くが失われ、いつしかこれらの資料は幻のものとなってしまういたのである。

今回の展覧会では山内によつて示された標式資料（\*）を可能な限り収集することを目指した。その結果、10点の現存を確認することができた。8点は1940年の姿をそのまま残していたが、2点は部分的に欠損していた。ここでは、今回現存が確認された10点の写真を紹介する。■

（\*）型式の基準となった資料を標式資料という。



▲『日本先史土器図譜』71)1 「武蔵国北豊島郡石神井関発見」 慶應義塾大学民族学考古学研究室



▲『日本先史土器図譜』73)1 「武蔵国北多摩郡久留米村前沢発見」 慶應義塾大学民族学考古学研究室



◀『日本先史土器図譜』71)2 「武蔵国南多摩郡川口村大字楮原発見」東京国立博物館



▶『日本先史土器図譜』73)2 「東京市杉並区新町井草八幡附近発見」井草八幡宮（写真のみ、展示はしません。）





\*戦災により焼失

\*所在不明



▲『日本先史土器図譜』74「東京市目黒区目黒発見」 東京大学総合研究博物館



▲『日本先史土器図譜』75「東京市杉並区新町井草八幡附近発見」 井草八幡宮（写真のみ。展示はしません。）



▲『日本先史土器図譜』76「東京市杉並区新町井草八幡所蔵。附近の発見か？」 井草八幡宮（写真のみ。展示はしません。）



▲『日本先史土器図譜』77)1「出所不明」 東京大学総合研究博物館



▲『日本先史土器図譜』77)2「東京市杉並区下高井戸三丁目発見」 慶應義塾大学民族学考古学研究室



▲『日本先史土器図譜』78「東京市杉並区新町井草八幡附近発見」 井草八幡宮（写真のみ。展示はしません。）



大山柏により調査された勝坂遺跡は、その充実した報告書も加わり全国的に著名な遺跡となったが、その後、長い間発掘されることはなかった。

しかし、1960年代に入ると、勝坂遺跡にも宅地開発の波が押し寄せ遺跡が壊されてしまうおそれが出てきた。1972年には、神奈川県教育委員会によって範囲を確認するための調査が行われ、縄文時代中期の竪穴住居跡が確認されている。また、この頃から遺跡の保存運動が高まっていった。勝坂遺跡の保存には、様々な困難が伴っており、ここでは、とてもその全貌に触れることはできないが、遺跡の保存を望んだ多くの活動と声が、1974年の国史跡への指定に結びついている。

周辺では、宅地開発などに伴い、小規模ながら幾度にもわたる発掘調査が行われてきた。

これまで数多く行われてきた勝坂遺跡の発掘調査の中でも、ひととき注目された発見に、1989～1991年に行われた第45次調査がある。

遺跡の西側、鳩川に面した段

## 勝坂遺跡のこれまで、これから



勝坂遺跡から鳩川へ下る斜面には、縄文時代と同様に照葉樹林が茂っている。相模原市天然記念物に登録されている。

丘面から縄文時代草創期の住居跡の遺構と当時の土器、石器が見つかった。草創期の住居跡は全国的に見ても見つかった例が非常に少なく、きわめて貴重な例である。発見された土器の特徴から、草創期の中でも古手の土器と判断され、旧石器時代から縄文時代への移り変わりの時期の人々の居住形態を考えると、欠くことのできない発見例となった。

勝坂遺跡は「勝坂式土器」命名の由来となった遺跡として著名だが、実は遺跡から見つかる土器は、勝坂式土器よりも新しい加曽利E式土器、曾利式土器が多い。堅穴住居などの居住の痕跡を見ても同様で、遺跡自体は勝坂式土器の時代より数百年後に最も栄えていたことが分かっている。

また勝坂遺跡は、大山柏によって「縄文農耕」が存在していた可能性が指摘されたことでも著名だが、現段階では、打製石斧は一定量出土するものの、それ以外には直接的に農耕を示すような資料は見つかっていない。



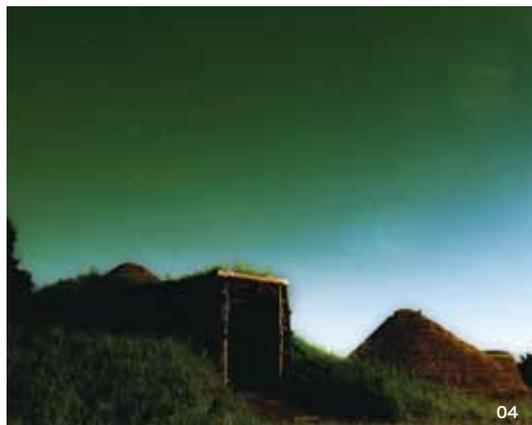
01



02



03



04



05

01 勝坂遺跡第45次調査出土土器。縄文時代草創期。神奈川県域の縄文時代の初源期の土器の一つである。展示は「\*」のみ。  
相模原市指定文化財 相模原市立博物館

02 勝坂遺跡第45次調査出土土器。縄文時代草創期。展示は「\*」のみ。  
相模原市指定文化財 相模原市立博物館

03 縄文時代中期加曽利E式期の住居跡（第30号住居跡）。床には平たい石が敷き詰められている。1994年に実施された、勝坂遺跡保存整備に伴う発掘で記録された。現在も勝坂遺跡公園において、保存されたこの住居跡を見ることが出来る。  
相模原市立博物館

04 勝坂遺跡公園の夜景。

05 大山柏が発掘調査した地点（勝坂遺跡A区）の現状。案内板がたてられている。



勝坂遺跡は、国史跡に指定され、保存された。現地には縄文時代の竪穴住居が復元され、脇を流れる鳩川へと下る斜面には縄文時代と同様に照葉樹林が生い茂っている。遺跡付近が住宅地であることもあり、夕方には子供たちが戯れ、犬の定番散歩コースにもなっている。休みの日には家族連れも多く見られる。

現在保存されている勝坂遺跡D区周辺は、1970年代前半には集合住宅の建設が計画された。しかし遺跡の重要性や希少性を鑑みて地元住民や研究者らが懸命な保存運動を展開し、その結果、1974年に計1万6591㎡を国指定史跡として保存することになったのである。

そこまでして遺跡を保存することになんの意味があるのだろうか――  
2011年3月11日、大津波が東北から関東の太平洋岸を飲み込んだ直後、自らの命も顧みずに、失った家族の写真や位牌などを探しに、かつて自宅のあった場所へ戻った人が多くいた。思い出の写真があったところで空腹が満たされるはずはないが、それがあつたことで、自分自身のアイデンティティや自らの居場所



史跡勝坂遺跡公園では、毎年11月初旬に「勝坂縄文まつり」が開催されている。相模原市土器の会が中心となつて行う土器焼きの他、様々な縄文体験ができる。

●体験コーナーのイベントって子供向けかと思いきや、意外と大人でも楽しめるものが結構ある。むしろ、「こどもに負けれない」っていつの間にか本気になってる大人もいて、見ても楽しい。



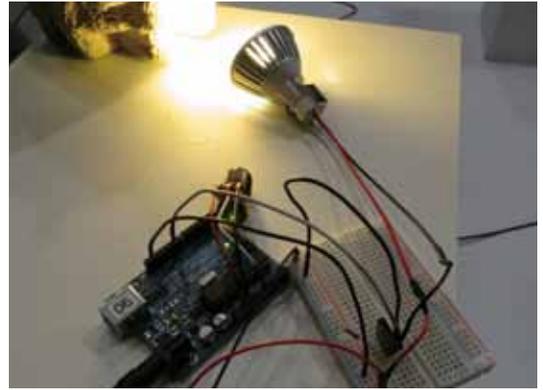
をなんとかつなぎ止めることができる、との想いからなのだろう。文化の中に生きる人間の本能的な欲求なのかもしれない。

個人にとってそれが写真や位牌であるなら、社会にとってはそれはその地域の歴史、過去の人々の生き様を伝える文化財そのものなのではないか。普段は特段意識をしないでも日々の暮らしに不自由することはない。しかし、ふと自分自身の足元を見つめ、その足跡を確かめたくなるとき、地域の文化財、遺跡が既に失われてしまっていたら、私たちはその欲求を何に求めればいいのか。

地域の歴史、足跡を忘れ、現代に生きる人間の欲求だけでその世界を作り上げようとするのが、どれだけの歪みを生じさせるかは、あえて言うまでもないことである。

遺跡が「土地」から切り離せない以上、すべての遺跡を現状で保存することはできない。現代の暮らしももちろん大事である。だからこそ、保存できた遺跡が伝えること、その価値をそれぞれ皆が考え、次の世代に伝えていくことが、現代に生きる私たちの役割なのだろう。■





謝辞

本展の開催および図録の制作にあたり、以下の皆様にご協力をお願いしました。心より感謝申し上げます。なお、敬称は省略させていただきます。

東京藝術大学大学院映像研究科

桐山孝司  
木村 稔  
新井 悟  
安藤広道

相模原市教職員互助会同好会土器づくりの会  
横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター  
横浜市歴史博物館

大塚靖夫  
小島三雄  
池田孝夫  
井出浩正  
稲葉佳代子  
稲村 繁  
宇都洋平  
関岡俊明  
小田穂高  
小田幸穂  
小野塚拓造  
小野塚廉人  
勝山俊也  
栗山雄揮  
後藤貴之  
今野まり子  
佐々木 茂  
佐藤健二  
佐藤雅彦  
佐藤玲子  
佐野 隆  
品川欣也  
菅沼 亘  
須田 誠  
関 隆  
高橋 勲  
高橋 玲美  
竹尾 進  
近森 正  
土屋了介  
堤 隆  
戸井晴夫

浅間縄文ミュージアム  
厚木市教育委員会  
井草八幡宮  
海老名市教育委員会  
小田原市文化財文化財課  
神奈川県立生命の星・地球博物館  
川崎市岡本太郎美術館  
川崎市市民ミュージアム  
慶應義塾大学民族学考古学研究室  
国分寺市教育委員会  
茅野市尖石縄文考古館  
東京国立博物館  
東京大学総合研究博物館  
東京都埋蔵文化財センター  
十日町市博物館  
韮崎市教育委員会  
八王子市郷土資料館  
平塚市博物館  
藤沢市教育委員会  
北杜市教育委員会  
町田市教育委員会  
町田市立博物館  
武蔵国分寺  
武蔵国分寺跡資料館  
山梨県立考古博物館  
横須賀市自然・人文博物館

阿部芳郎  
今井 準  
鈴木希帆  
港 千尋  
望月 純  
青柳恵美  
小田幸穂  
守屋幸一  
矢島律子  
柳 世莉  
山下裕二  
山下りか  
山科 哲  
山田俊輔  
吉田賢治

図の出典 (一部改変したものも含む)

- 井草八幡宮 (31頁中段)
- 川崎市岡本太郎美術館 (19頁下段、20頁上段、21頁上段)
- 相模原市立博物館 (33頁上段、中段)
- 茅野市尖石縄文考古館 (12頁右下)
- [NM Image Archives (18頁中右、20頁右下、21頁左下、30頁中左)]
- 今井 準 (27頁)
- 大塚靖夫 (12頁左下)
- 小川忠博 (ポスター・チラシ) 新潟県森上遺跡出土土器
- 港 千尋 (22頁右下) 長野県川原田遺跡出土土器

写真提供

- 2頁 小林謙一ほか二〇〇三「歴史を語るサイエンス」国立歴史民俗博物館
- 3頁 安田喜憲一九八〇『環境考古学事始 日本列島二万年』NHKブックス
- 今村啓爾一九九七「縄文時代の住居址教と人口の変動」『住の考古学』同成社
- 神奈川県立生命の星・地球博物館二〇〇四「企画展 十℃の世界―縄文時代に見る地球温暖化―ワークテキスト」
- 6頁 今福理恵二〇〇八「勝坂式土器」『総覧縄文土器』アムプロモーション
- 縄文時代研究プロジェクトチーム一九九八「神奈川における縄文時代文化の変遷Ⅴ 中期中葉期 勝坂式土器文化期の様相」『かながわの考古学』三
- 15頁 小林謙一「縄紋中期土器器面の文様割付について」『セツルメント研究』二号、セツルメント研究会
- 29頁 大山栢一九二七「神奈川県下新磯村字勝坂遺物包含地調査報告」史前研究会
- 今村啓爾一九八九「群集貯蔵穴と打製石斧」『考古学と民族誌』六興出版
- 30 | 31頁 山内清男一九四〇「第Ⅳ輯 勝坂式」『日本先史土器図譜』
- 33頁 山本暉久二〇一二「勝坂遺跡」『相模原市史 考古編』相模原市

平成24年度かながわの遺跡展・巡回展「勝坂縄文展」

平成24(2012)年12月15日発行

編集 神奈川県教育委員会 教育局 生涯学習部 文化遺産課  
中村町駐在事務所(神奈川県埋蔵文化財センター)  
〒232-0033 横浜市南区中村町3-191-1  
tel 045-252-8661 fax 045-252-8663

発行 神奈川県教育委員会  
印刷 コトブキ印刷工業有限公司



●展覧会を開催するには、ここにお名前を挙げさせていただいた方だけでなく、たくさんの方々にご協力をいただいています。本当にありがとうございます。



国指定史跡 勝坂遺跡 (神奈川県相模原市)



神奈川県教育委員会〔埋蔵文化財センター〕  
神奈川県立歴史博物館  
相模原市教育委員会〔博物館・文化財保護課〕